

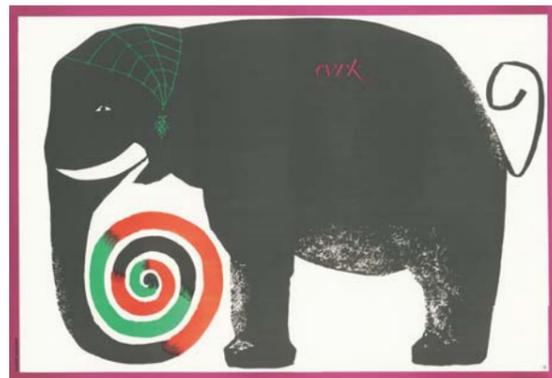
チェコ ポーランド ハンガリーのポスター

このたび美術工芸資料館では、2015から2016年に本館で企画展示したハンガリー、ポーランド、チェコのポスターに関する3度の展覧会の集大成となる「チェコ ポーランド ハンガリーのポスター展」を開催する(2017年6月19日～8月11日)。

本館が収蔵するチェコ、ポーランド、ハンガリーのポスターは、1986年に寄贈された甲斐コレクションが基盤となっており、その後、ポーランドのポスターは、本学の助教授であった黒崎彰氏が教材用にクラコフ版画ビエンナーレの賞金を充てて収集した黒崎コレクションや、竹内次男元館長の竹内コレクションをはじめとして、多くのポスターが寄贈され、本館に収蔵されている日本のポスターに次いで二番目に多い700点の収蔵数になった。チェコのポスターは、2005年にヨゼフ・フレイシャーのポスター群が加わって約180点になり、ハンガリーのポスターは約70点収蔵されている。

チェコ、ポーランド、ハンガリーは、第二次世界大戦後から1989年までの約半世紀にわたり、ソ連の影響下にある社会主義国となった。この体制下では、芸術家は公式な場で自由に芸術活動をおこなうことを許されず、多くの芸術家たちは表現の場を求めて、あるいは生活の糧を得る手段として、ポスターや絵本、エディトリアルなどのグラフィックデザイン分野で活躍した。これらの国々では、商品売り込むための商業ポスターが存在せず、演劇や映画、展覧会、コンサートなどの催しを告知する文化的なポスターが主に作られた。

1950年代初期の社会主義リアリズムの時代、デザイナーたちはプロパガンダのポスターをデザインするように国家から強いられしたが、1950年代半ばから、いわゆる社会主義リアリズムの典型的な写実的スタイルとは異なり、コラージュ、フォトモンタージュ、写真、線画、絵画、タイポグラフィなどの技法を用いた、より平面的で簡潔なデザインの芸術的なポスターが制作さ



フベルト・ヒルシャー
「サーカス」1970年代 AN.4904-87

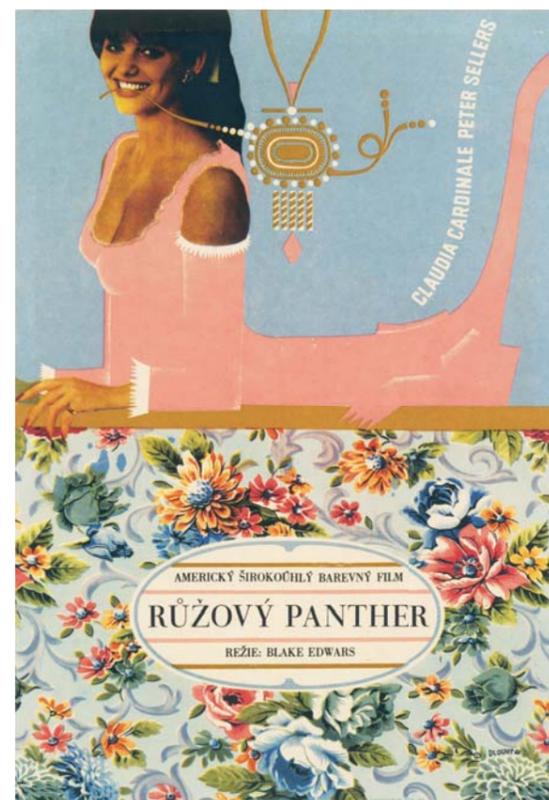
れるようになった。特に1960年代はソ連による政治的な規制が緩和され、検閲がほとんど機能しなくなった時期でもあったため、独創的なポスターが次々と生まれた。

ポーランドでは、1940年代後半からすでに、他のヨーロッパ諸国や海外のものとはまったく異なる芸術的な方法でポスターがデザインされ始めた。1948年にヘンリク・トマシェフスキが、ウィーン国際映画ポスターコンクールで受賞したのをきっかけに、ポーランドのポスターは国内のみならず、「ポーランド派」として世界的に知られるようになり、その後チェコやハンガリーの人々にも影響を与えた。ポーランドのポスターは、写真を用いた表現が少なく、手描きのイラストレーションを得意とする画家が先頭になって制作したことが特徴である。ポーランドの国家が特に力を入れて取り組んだサーカスを告知するポスターは、ポーランドを代表するデザイナーが手がけた。「CYRK (ポーランド語:サーカス)」という手書きの文字がレイアウトされたポスターには、象や犬、クマ、ライオン、ピエロなどの色鮮やかなイラストレーションが大胆に描かれており、隠喩やシンボルを使いながらサーカスの雰囲気やユーモラスに伝えている。ポスターには「サーカス」以外の文字情報は一切記載されず、イベントの詳細は、細長い紙に印刷されて、ポスターの下に添えられていた。

ポーランドは1966年に、世界初の国際ポスターコンクールとして「ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ」を開催し、第1回大会では、ポーランドのヤン・レニツァとともに、日本のデザイナーである永井一正、田中博が金賞を受賞した。その他の受賞者には、亀倉雄策、福田繁雄、田中一光、アンディ・ウォーホルなどもある。また、1968年には、世界で初めてポスターを専門に扱うヴィラヌフ・ポスター美術館がポーランドに設立された。

チェコでも、個性豊かな映画や演劇、コンサートなどのポスターが作られており、中でもひととき異彩を放つのが映画ポスターである。チェコの映画ポスターは、映画『ピンク・パンサー』のポスターのように、俳優の写真を大胆に加工してデザインしていることが多い。チェコのポスターを制作したのは、画家だけでなく、建築家、彫刻家、タイポグラファー、イラストレーター、写真家、舞台芸術家など、あらゆる分野の芸術家であり、絵画やイラストだけでなく、コラージュやフォトモンタージュ、タイポグラフィなど、幅広い表現手法が用いられた。それぞれの芸術活動において独自の表現を追求していた芸術家によって個性の強い映画ポスターが多く作られており、アーティストがポスターを自由に表現すること、見る側が自由に解釈することが大切とされていた。

ハンガリーで、1960年代に特に人気を集めたのが、アメリカの現代アートやサイケデリックのポスターから刺激を受けた、



ベドジフ・ドロウヒー
「ピンク・パンサー」(1963年アメリカ映画)1966年 AN.4738-68

非常に鮮やかでカラフルな「ポップアート」のポスターだった。社会主義体制下では様々な文化芸術活動が制限されていたが、デザイナーたちは展覧会や雑誌などを通して、西側諸国を含む世界中の芸術から影響を受け、独自のポスターを制作していた。その一方で、検閲官たちは西側諸国の芸術様式の流行を把握していなかったため、それらのポスターは許容される傾向にあった。1960年代のハンガリーでも、印刷・出版物は国営広告会社(MAHIR)に管理されており、ポスターを出版するかどうかを決定する審査員のメンバーに芸術家が多かったのに対して、ハンガリーでは、映画『裸の羊飼いの』のポスターに見られるような、ハイコントラストの白黒写真が好んで使用され、俳優を目立たせるような形でコラージュされた。

街中に貼られたポスターは、必要最小限の宣伝の機能を備えながら、表現豊かなデザインが、見る人の心を癒やしたり、楽し

ませるものとなっていた。これらのポスターを通して、各国の文化、言葉、生活、歴史背景から生み出される表現の違い、さらにはデザイナーひとりひとりの持つ個性や遊び心をお楽しみいただくと幸いである。

なお、美術工芸資料館では、館所蔵作品をひろく一般に知ってもらうために、2017年より「美術工芸資料館デザインコレクション」シリーズを青幻舎より刊行することとなった。第1冊目となる「チェコ ポーランド ハンガリーのポスター」は2017年6月、展覧会に合わせて刊行する。

(美術工芸資料館 技術補佐員 中川可奈子)



コヴァーチ・ヴィルモシュ
「裸の羊飼いの」(1966年チェコスロヴァキア映画)1967年 AN.4727-44

参考文献:

Marta Sylvestrová et al., Czech Film Posters of the 20th Century, Prague: Moravian Gallery in Brno and Exlibris Prague, 2004

ポーランドポスター展実行委員会『ポーランドポスター展=Polish poster '50-'60』光画コミュニケーション・プロダクツ、2012年
武蔵野美術大学美術資料図書館編『ポーランドアート・ポスター展—伝統と革新の半世紀』武蔵野美術大学美術資料図書館、1998年